



INAX MUSEUMS

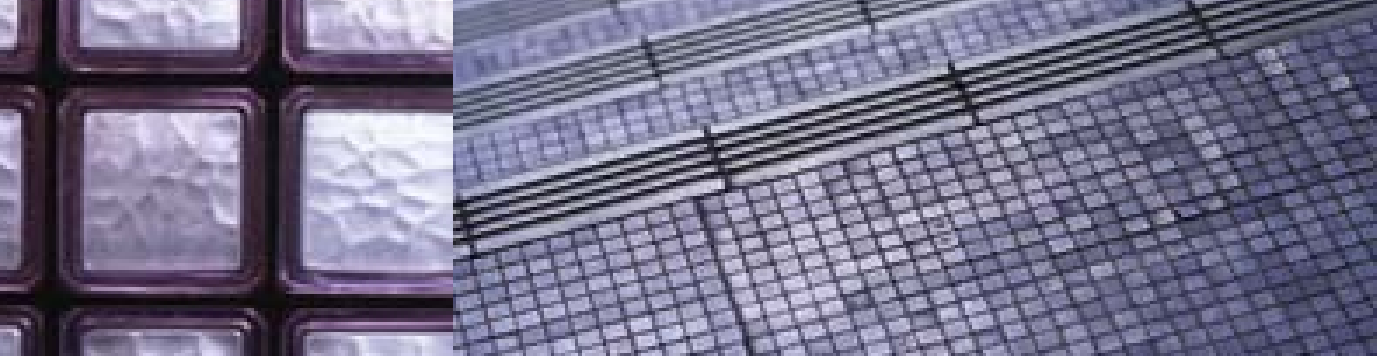
INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集 時代を越えて
愛される建築

vol. 30 | 季刊 冬
2014

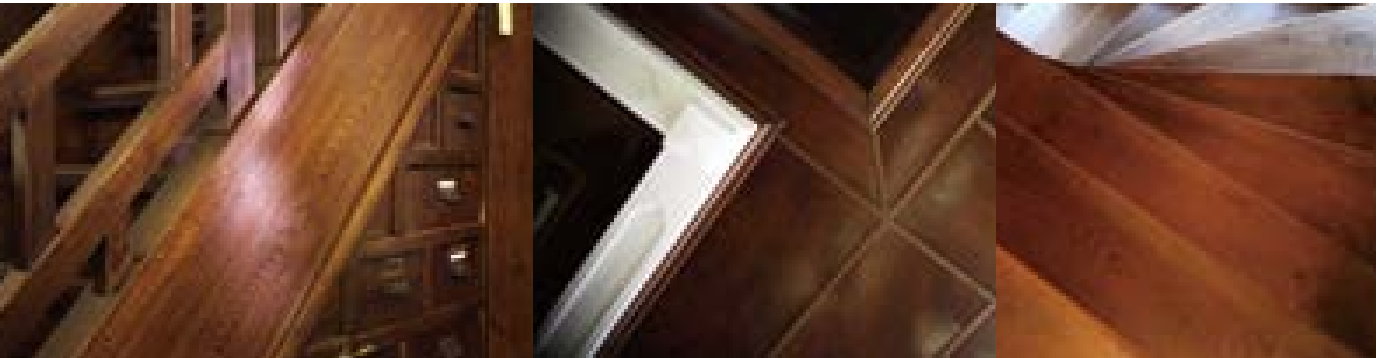




時代を越えて愛される建物は、ただそこにあるだけで周りの空気を変える。
その屋根の下、何代にもわたって人々を見守り、過ぎゆく年月を見送り、今、そこに建っている。
そんな建物を巡り歩けば、歴史が呼び覚まされ、
細部を見れば、建築につぎ込んだ人々の思いにふれる。
知多半島、今も現役の古い建物を訪ねて、その物語を探した。



T i m e l e s s a r c h i t e c t u r a l a c h i e v e m e n t s



特集 時代を越えて愛される建築

INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

01 [特集] 時代を越えて愛される建築

LIVE SCHEDULE

これからの催し

- 06 企画展「建築の皮膚と体温
—イタリアモダンデザインの父、ジオ・ポンティの世界」
企画展「ラスター彩タイル—天地水土の輝き」

LIVE REPORT

開催報告

- 08 光るどろだんご全国大会 2013
企画展「ラスター彩タイル—天地水土の輝き」
関連セミナー「イスラーム美術とラスター彩タイルの魅力」
- 09 フィンランドからサンタクロースがやってくる！
陶と灯の日

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER

vol.30 | 季刊 冬
2014

表紙写真

「わぁ、きれいだね」と会場に入ってきたご家族。さっそく椅子に腰かけてポンティの空間を体感。今日は常滑小旅行。器を買ったり、世界のタイル博物館を見学したり。やきものの街を堪能した一日でした。

(2013.11.16)

撮影：藤枝彩子

常滑から*

29

裸のつきあい 岡本太郎と常滑



提供：藤井四郎氏



提供：常滑市

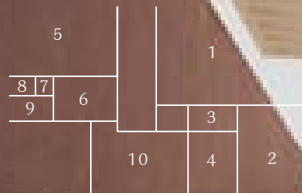
2013年10月24日付の中日新聞1面に「岡本太郎 常滑で44年前に制作。割れない友情絵皿に」という記事を見つけ、絵皿を見るために、とこなめ陶の森資料館を訪ねました。

1969年、岡本太郎が翌年の大阪万博のために「太陽の塔」を制作しているなか、常滑青年会議所が講演会に招き、その後もてなしをした理事長(当時)の藤井四郎さんがお礼にと受け取った皿だそうです。この皿と共に展示されていた写真には、太郎と藤井さんとの信頼関係を感じ取ることもできる、文字通り「裸のつきあい」の様子が写っていました。

太郎は1952年にモザイクタイル壁画制作のため常滑の地を訪れ、父一平のお墓として、初めての立体作品である陶製のオブジェ「顔」を3体つくりました。それ以降は、多治見や信楽で数々のやきもの作品をつくっていたようで、常滑とは疎遠になっていたとばかり思っていたのですが、「裸のつきあい」が継続していたことがうれしく、アーチストを育む「常滑」の魅力を感じています。

後藤 泰男
〔LIVE〕広報部文化企画◎

※INAX創業の地・常滑の人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



1 外観。全体が淡い紫のモザイクタイルで包まれている。向かって右側の1階、2階が事務室・会議室など、左側が吹き抜けの展示室。庇の連続する梁が力強い。昭和34年、初代常滑市長で伊奈製陶(株)の創業者である伊奈長三郎が、個人所有の同社株式15万株を常滑市に寄付し、その資金を基に建設された。
 2 展示室。陶磁器鑑賞にふさわしい自然光のトップライト。
 3 屋上のトップライト。同じデザインのパーゴラが庭にある。
 4 当時まだ珍しかった吊り階段は金色。左壁のコンクリート打ち放しからは、職人たちのていねいな仕事がかかる。
 5 2階のベランダ。深い庇のおかげで、「雨が窓に当たらないし、夏も暑くない。毎日快適に過ごせています」とのこと。左下に設けられているのは、当初、青竹で作られた縁側。深い庇が雨や日差しから守ってくれるので、今も座り心地が良い。
 6 ホールから正面玄関を見る。紫色のガラスブロックの淡い光。
 7 堀口捨己デザインの椅子。図面も残されている。
 8 和室。炬が切っており、畳を替えると研修のための茶室になる。天井は人工照明、壁面は自然光。モダニズム建築と日本の伝統文化のみごとな統合が、ここにも見られる。
 9 ホール天井の照明。メタルの照明カバーも現代的デザイン。
 10 外壁のモザイクタイル。上部と下部にはグラデーションが施されている。職人の手仕事だ。

直 線的でモダンな外観。日本家屋の風情がある3・5mの深い庇が印象的だ。開館は昭和36(1961)年。設計は当時明治大学教授だった建築家・堀口捨己。常滑の陶芸を発展させるための研究と人材育成を目的に建設された。初代顧問には、常滑出身の哲学者・谷川徹三が就任している。

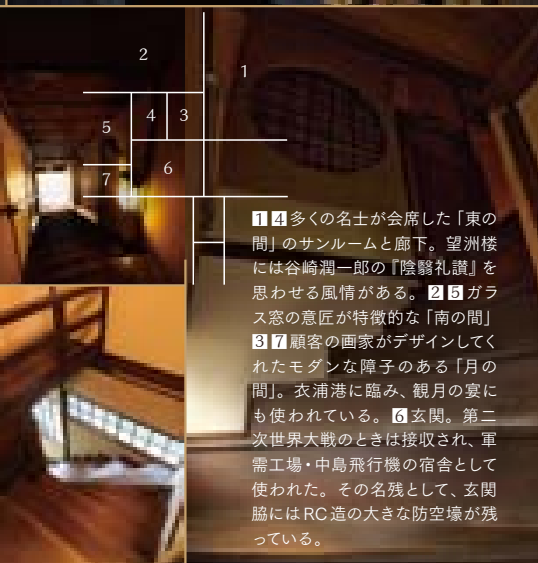
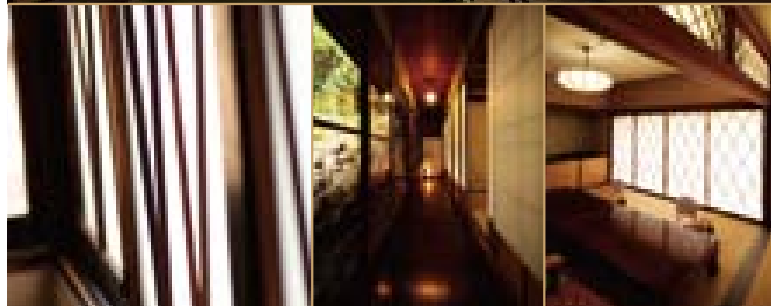
「開館当時は日本のみならず、海外からもこの建物を見に人々がやってきたそうです」と話すのは、主事の家永信昭さん。著名人も多数訪れ、サロンのような役割も果たしていたという。「築52年経っていますが、私たちは何も新しくしていません。建物ばかりか、庭の石一個、植栽一本まで、すべて堀口先生がデザインされたものです。やきものと同じように一つの作品ですから、形を変えるようなことは一切やりたくないと考えています」。

外壁には一面に紫色のモザイクタイルが張られている。その色は風雨にさらされてくすんでいるが、トイレに張られている同じタイルを見ると、鮮やかな色彩に驚く。窓枠は当時珍しいサッシ。「堀口先生は最先端の素材を使いたかったようです」。

一番のテーマは「光」だ。なかでも展示室は、陶磁器鑑賞にふさわしいように、高い天井から自然光を取り入れている。光の反射を考えて、室内はシルバー一色。天井は折り紙を折ったような意匠。壁面はガルバリウム鋼板に見えるが、実は、凹凸が施された木板に塗装されている。屋上に設けられたトップライトのデザインも繊細で大胆だ。

正面の扉は銀色、両脇のガラスブロックは紫色、ドアノブ周囲の丸い金具と吊り階段は金色、各部屋のドアノブ周囲にも明るい赤・黄・緑・青などのアクリル板。実に豊かな色彩。ホール天井の照明やカバーなど、細部までていねいにデザインされているのを見ると、愛情を持って、楽しんで設計する堀口氏の姿が見えるような気がする。





1 多くの名士が会席した「東の間」のサンルームと廊下。望洲楼には谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』を思わせる風情がある。2 5 ガラス窓の意匠が特徴的な「南の間」3 7 顧客の画家がデザインしてくれたモダンな障子のある「月の間」。衣浦港に臨み、観月の宴にも使われている。6 玄関。第二次世界大戦のときは接収され、軍需工場・中島飛行機の宿舎として使われた。その名残として、玄関脇にはRC造の大きな防空壕が残っている。

幕

末の安政2（1855）年に宿屋「中口屋」として亀崎に開業。明治の初めに「衣ヶ浦」を一望する斜面に木造平屋一部2階建の建物を新築、名も「望洲楼」と改め、料理旅館として有名になる。田山花袋、柳田国男などが宿泊した記録もあり、「大正広重」と呼ばれた絵師・吉田初三郎も「望洲楼鳥瞰図」を描いた。

「当時の亀崎は醸造業が盛んでした。尾張廻船の寄港地としても栄え、非常にたくさんの方が集まってきた。それで、この仕事を始めたのでしよう。以後、建物の増改築や修繕を繰り返しながら今も営業しています。私が子どもの頃にはここに大工さんもいたんですよ」と、九代目になる成田（なると）一郎さん。

建具はすべて木製、趣のある風景を映す窓ガラスは今やコレクター垂涎のアンティークガラス。斜面に沿ってうねうねと建物が連なり、階段を何度も上って部屋に至る。時代を見つめてきた建物の中を進んでいく時間は、歴史の重みを感じながら、タイムスリップしていくようだ。

ユタカフーズ(株)本社事務所

武豊町



そ

こは、デスクが並んだ事務所。しかし見慣れた事務所の風景とは印象がちがう。高い天井は樺板張りの格天井。見渡す室内は茶色の木部と漆喰の白い壁で構成され、落ち着いたたたずまいを見せる。建設は昭和15（1940）年。ユタカフーズの前身である山二製材所の社屋として建てられた。かつて株主総会も開かれたというステージのある2階ホール。「材木会社だったので贅沢に木が使われているでしょう」と、総務部の奥村義信さん。「昔はこういう事務所が数軒あったのですが、うちだけになりました。今の事務所ビルのようにはいきませんが、なんとか使い続けています」。

外観は、三角が印象的な半切妻屋根。大正期の学校や役場の外観をモデルにしたものと言われている。戦後、醸造業がさかんなこの地で食品産業に業種を変えて発展。1999年に現社名に変更。この建物は、ここで働く人々を時代を超えて見守ってきた。

*見学はできません。

1 2階ホール。床、天井、扉はすべて樺板。天井板のはめ方は、1階の格天井とは違い、変化を持たせている。樺の木は長野県から取り寄せ自社で製材。地元の大工、山二製材所の社員も施工にあたった。3 2階北東側にある応接室 4 1階から2階への折り曲げ階段 5 屋根の三角部分は茶系、破風板は白。壁面は白く塗った下見板横張り。道路から見ても、すく目に飛び込んでくる。

